

大友宗麟の実像



【大分市が「豊後府内」と呼ばれた戦国時代。この地に南蛮文化をいち早く取り入れ、国際文化都市として繁栄させた「大友宗麟公」をシリーズで紹介します。】



大友宗麟公像
(JR大分駅前)

第10回

宗麟と南蛮医アルメイダ

1545(天文14)年、宗麟が16歳のとき、弟の晴英が南蛮から伝来した鉄砲を試し撃ちした際に、鉄砲が暴発し手をけがしてしまいます。その傷は当時、府内(現大分市)に滞在していたポルトガル人によって手当てされ、宗麟は見たことのない進んだ西洋医術に大きな驚きと興味を持ったようです。それは、後に府内が西洋式病院発祥の地となることにつながっていきます。

1555(弘治元)年、宗麟の保護のもと行われたキリスト教の布教活動に、ポルトガル人のルイス・デ・アルメイダが加わります。医師でもあったアルメイダは、貧しさから子どもを手放す親の姿に心を痛め、宗麟の賛同を得て、同年、府内に育児院を建てます。

また、2年後には日本初の西洋式病院が開設され、内科は日本人の修道士、外科はアルメイダが担当し日本で最初の外科手術も行われました。

病院は入院病棟を備え、不治の病の患者なども受け入れ、ミゼリコルディア(ポルトガル語で「慈悲」を意味)といわれる組織の献身的な看護により支えられていました。府内はボランティア発祥の地でもあったのです。

南蛮医アルメイダの名声は全国に広がり、遠く京都や大阪などからも患者が訪れたといわれています。この背景には、若き宗麟の西洋医術に対する強い関心があったからでしょう。



西洋医術発祥記念像(遊歩公園)
外科手術を行うアルメイダ(中央)

アルメイダの精神は、1969(昭和44)年4月、大分市医師会によって設立された「大分市医師会立アルメイダ病院」の病院名によって現代に顕彰されています。